

肝細胞癌の診断における肝特異性造影剤の有用性についての検討

【研究対象者の方へ】

本研究は、九州大学病院で肝悪性腫瘍が切除された症例の中で、術前にSPI0投与下MRIあるいはGd-E0B-DTPA投与下MRI画像が撮像された方（期間：2006年から2010年）を対象に研究させていただきます。

対象者となることを拒否される方は、下記連絡先までご連絡下さい。

【はじめに】

肝臓腫瘍を診断する際にMRIは大変有用な検査法です。使用する造影剤はSPI0あるいはGd-E0B-DTPAという肝臓に特異的にとりこまれるものです。前者は肝臓のクッパー細胞に、後者は肝細胞に取り込まれますが、正常機能を有さない腫瘍では一般にその取り込み機能がないために、周囲肝組織とのコントラストが明瞭となり、MRIで検出が容易となります。一方早期の肝細胞癌などでは腫瘍細胞に正常の肝機能が残存するため、上記造影剤の取り込みが一部残存し、信号変化は軽度となります。この特徴を利用して、早期肝細胞癌の発見が可能となると考えられています。また一部の進行癌でもこれらの造影剤を取り込む場合があり、そのため信号変化が軽度にとどまり、診断を困難にしている場合があります。これらの腫瘍の特徴に関しては、これまでほとんど研究されていません。

【研究内容】

MRIの画像を振り返ってどのような肝細胞癌が造影剤をとりこむのか、切除された標本と対比することでその特徴を明らかにします。

【研究期間】

研究を行う期間は2011年3月までと考えています。

【医学上の貢献】

造影剤を取り込む早期肝細胞癌を検出することで、早期治療につながります。またその特徴を明らかにすることで肝細胞癌に対する治療方針（手術ができるのか、術後に追加の治療が必要なのか、嚴重に経過を見る必要性など）の決定に役に立つと考えています。

【患者さんの個人情報の管理について】

個人情報保護のため、各症例に研究のためのIDを割り当てデータの匿名化を行い、個人が特定できないようにします。画像データと解析結果は患者の氏名・生年月日・ID番号を除去し、研究IDを付けて、放射線科学教室内の外部と切り離されたコンピューター内に保管します。

【研究機関】

九州大学大学院 臨床放射線科

本田 浩（教授）、浅山 良樹（担当）、田嶋 強、西江 昭弘、石神 康生、
柿原 大輔、中山 智博、高山 幸久、岡本 大佑

九州大学大学院 消化器・総合外科

調 憲、武富 紹信

九州大学大学院 形態機能病理

相島 慎一、藤田 展宏

連絡先：〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

Tel 092-642-5695 （臨床放射線科 浅山まで）